

Title	中井信彦氏提出学位請求論文：歴史学の方法と基準
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.239- 242
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報 学位論文審査報告
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の春にわれわれのキャンパスから失ったことは、まさに塾の損失であると云えよう。同時に大田区立博物館長として君の才が遺憾なく發揮されている今日、私としては心から祝福の辞をおくるとともに、何か肩の荷がおりたような気もするのである。今後の末永き御発展をお祈りしつつ筆をおくことにしたい。

学位論文審査報告

中井信彦氏提出学位請求論文

歴史学の方法と基準

本論文は昭和四八年に刊行された同名の著書である。著者は幕藩制の研究を始め近世社会史・経済史の領域に数多くの卓抜な業績をあげて既に学界に令名高い国史学者であるが、その長い研究生活の途上において自らの歴史叙述の方法と原理を一つの理論として世に問うたのが本書である。尨大な史料を扱って具体的な史実の再構成に専念している歴史家が理論書を書くことは稀であるが、著者は敢えてそれを試みた。その執筆の動機は著者自身のことばが語って余すところがない。「歴史家の仕事は、それ自身としては職人仕事である。だから、理屈ばったことは、どうしてもにがてになる。だからといって、理屈ぬきでやっているわけではない。理屈をおもてだてるのはやっかいであるし、おもてだてぬ方が安全でもあるのである。けれども、だれもが一度はおもてに

だしてみるべきものであると思う。歴史家の場合、理屈が先行するのではない。先行する——先学の理屈によりながら行なう個別の仕事のなかから、途中から形をとりだしてくるのである。それは、当然、暫定的なものであり、その後の個別な仕事を通して、つくり変えられていくのはずいぶんものである。」こういう理論構成の仕方であるから、その理論は完結するものではないが、それが理論的整合性をもち、体系に破綻がなく、その一般化命題が普遍的妥当性を有するならば、独自に評価されるべきである。著者はすぐれた歴史記述家であるが、同時に強い理論志向も持っている。それに自らの学的生命を賭けているかにも見える気魄を示している。従ってわれわれの審査は、著者の尨大な歴史叙述にこの理論がどう適用されているかという点の検討は省略しても、対象を本書一冊に限ってその理論書としての価値を検討することで十分果たされると思う。

さて本論に入ろう。本書は第一部「柳田国男の歴史学」と第二部「歴史学的方法の基準」(この題名はデュルケームを連想させる)という二部から成っている。この構成は一見奇異である。一つの前提または原理から演繹的に展開してゆく理論構成もあるが、本書はそれとは違って、柳田、デュルケーム、オットー、M・ウェーバー、マルクス等異種の理論を組み合わせ「歴史学的方法」という一本の繩をなうような構成の仕方をしている。従って著者の理論展開に沿ってそれら諸理論の位置付けを見るしかない。まず第一部において柳田国男の著作から人類学・民俗学ではなく歴史学の方法を読み取ったこと自体がユニークな解釈である。それ

は「一回性のない歴史」というものである。この表現にはおそらくランケ的な近代史学、または新カント派の歴史哲学に対する柳田の批判が含まれているが、また現在、一回的な事件史に対するアナール派の構造史の反論を媒介として社会史の方法が世界の歴史学界の中心論題になっているとき、期せずして柳田の視点がそれを先取りしたかたちになっている。柳田はくりかえさない歴史の向うにくりかえすものを見た。それを法則というが、それは時間的・段階的なものではなく、「常民の生活のパターン」である。

即ち、常民の歴史は(1)自然の中でそれに働きかける生産的労働の編成を基礎にもって、(2)その上に営まれる衣食住・婚姻・教育・趣味などのハレとケの循環をする生活、(3)それらの営みが目ざしている生きがい、という三つの次元を含むものと考えられている。そしてそれら諸次元を漠然とした「政治」が統合していると見ている。そのくりかえされるものの変化または推移が即ち一回性のない歴史なのである。つまり一回的事実をくりかえすものとして捉え直すのである。そのためには一回的な事実内に在する何か共通性を見出さなくてはならない。著者によれば、その生活の諸側面・諸層位に共通のものは「人間が生きることの不安」である。そしてその不安のなかで群(集団)をなし犠牲を伴いつつ、「美しく生きようとする願望」である。この二つの指標が人間の集団生活の前提であり、つまり常民の生活史のパターンである。

これは柳田史学の独特の歴史への視角であるが、それは同時に著者の視角でもある。第一次大戦後の反動恐慌期から戦中・戦後

の暗い歴史を小市民的に生きつづけてきた著者の「内的な体験の対象化」でもある。あるいは、愚民の開化を歴史観の主軸とした福沢とは違って、「蚕の如くまた鶉の如く働かされた人々への愛惜」を主軸とした柳田の感情に著者の感情がオーバラップしている、ともいえる。

かくて、まず、柳田史学の掌握とその照射を「一回性のない歴史」ということばにしぼり、これに基いて膨大な柳田の著作を極めて適切に選択したこと、従来の柳田研究者がさほど重きをおかなかった著作の意義を掘りおこし、十分にこれを利用してのこと、今までの歴史家が目をとざしていた常民のケの生活に着目して新しい対象を掘りおこしたことは、高く評価されるべきである。

しかし、著者は第二部において、この柳田的な情念から、ウェーバーの『経済と社会』のスタイルを取入れて命題、副命題、その説明という形式で議論を展開し、法則科学的志向を強く打出してくる。ここでは第一部において柳田史学の核心と著者の内的体験の重なる契機としての「生きてあることの不安」は「人間性の欠如」ということばに置きかえられる。「物質的であれ非物質的であれ、人間がその生活を生産するに際して常に協働し、他の人間と交通を豊求し、渴望するのは、人間それ自身に内在する欠如性にもとづく」と言う。つまり欠如性が歴史の発展の基本矛盾であって、「悠久な歴史の軌跡の人間の基礎はその欠如性に求められる。」マルクスが歴史のライト・モチーフを「所有」に置いたのに対して、著者は「欠如」に置いた。この着想はまことにユニークである。それに基いて第二章「歴史的社会的構造」、第三章

「歴史形成のメカニズム」において日常生活の生産と再生産のしくみが語られるが、基底にマルクスのいう土台、即ち経済構造を考へ、その上に習俗の次元を考へる。その習俗の次元はウェーバーにならって、経済的・政治的・審美的・性的・知識的・宗教的という六つの領域から成るが、ウェーバーが政治的なものをこの領域の一つと見るのとは違って、著者は他のすべての領域に関わり、それを統合するものと見ている。またマルクスが土台と上部構造に二分したのに対して、著者は上部構造を日常的な「習俗」の次元とその上に非日常的な文化「形象」の次元を設定してつごう三次元にしたところがマルクスとも異なる。土台には勿論マルクスと同様強い自律性を認めるが、上部二次元に対する規定性も認める。最上部の文化形象の次元にも自律性と規定性を認めるから、この自律性と規定性をもつ上下二次元の間にはさまれるのが「習俗」の次元である。こうして土台に経済史が対応し、形象に文化史が対応し、習俗の次元に社会史が対応する。それ自体自律性も規定性も持たない習俗の次元がまさに人間の歴史であって、しかしこれが媒介することによってのみ土台も形象も歴史を動かす力になり得る、というのである。

つまりこの次元に柳田の一回的でない常民の歴史が相応するのである。この習俗を中心とした三次元間の構造関連を理論的にとらえ得たことが本書の最大の功績である。こうして柳田の理論はウェーバー、マルクスの理論に接合され、その常民史観が経済・社会・文化の重層構造に体系化され、柳田の情念が歴史形成のメカニズムにまで論理化される。著者はこの理論化に細心の推考を

加え、論旨に破綻はない。著者の抱いていた構想は柳田への共鳴によって明確化し、ウェーバーとマルクスの理論を援用することによって理論化に成功した、と思われる。

勿論著者自身「暫定的」であることを承知のこの理論にいわば積み残した問題がいくつかあることは言うまでもない。まず著者は、柳田に対して、常民が農村から都市へ移ってもその同類性を失わないと見たことを卓見とは認めても、都市常民の実態がその生産労働編成の変化を伴って語らるべきであるのにそれが無いのを不満とし、また近代都市常民については、底辺への政治の切り込みが資本論理の貫徹という視角を欠いては具体化されないという弱点を見逃してはいない。また著者自身においては、著者は歴史に究極的に「理解」と「総合」を求めているので、その限りマルクスよりはウェーバーにより多く依拠するが、「理解」はさて置き「総合」には未決の課題がある。著者は歴史のいかなる瑣細な部分にも全体が投影しているというが、その全体は断片的事実との間にただ交流的に構成されるだけのいわば「方法的説仮」にとどまっている。それならば歴史の総合はそのつどつくり変えられる相対的なものでしかない。それでいいのか。著者はマルクスを手がかりに、この点の解明に一歩進めようとしているが、マルクスの考えた歴史の「総体」を自らの歴史の「総合」の中にどう取入れるか歴史哲学的課題をのこしている。

結論として、まず第一部における柳田の常民史観が柳田史学の全体系の構成にとつてかなめ石であるという指摘と、そこに柳田史学の将来に向けての未開拓の分野のひろがっていることを敏感

に指摘していることも、それによって柳田史学を継ぐ者の道を照らしていることも、高く評価される。また、現在、事件史と構造史の対立を媒介するものとしての著者の主唱する社会史の方法が日本の歴史学界をリードしているのを見ても、本書は著者ひとりの仮説ではなく、普遍的な妥当性をもっていることが明らかである。この理論書は、数十年に及ぶ著者の歴史研究が厚い下地になって、その常民史観の情念を緻密な理論に体系化することに成功している点、歴史家の書いた理論書としてこれだけ精緻なものもなく、学位を得るに十分の労作であると認められる。

昭和五五年九月二六日

論文審査担当者

主 査	慶応義塾大学文学部教授	神 山 四 郎
副 査	慶応義塾大学名誉教授文学博士	池 田 弥 三 郎
	慶応義塾大学文学部教授文学博士	清 水 潤 三
	慶応義塾大学文学部教授	河 北 展 生

矢数四郎氏提出学位請求論文

日本における後世派医学史の研究

— 曲直瀬道三及びその学統 —

本論文は東洋医学者として令名のある著者が旁ら力を注ぎつづけてきた後世派を中心とする東洋医学史に関する積年の研究成果を集成したものである。

本論文は、序章を含めて本論三章に関連の論考を収めた付章を

加えた全四章で構成され、これに著者の校訂によって影印翻刻された三冊の資料が参考として添付されている。

本論文の内容を要約すると、まず序章「日本における東洋医学の展開と後世派医学の特質」において、中国医学の伝来から西洋医学法制下の存続と復興におよぶ漢方医学の歴史を概観(第一節)したうえで、本論文が主題とする後世派医学(金元李朱医学)の特色とその歴史上の位置を述べている。すなわち、陰陽思想にもとづく陰証・陽証の形と虚証・実証の質との相待説、五行の思想にもとづく五臓の相生・相剋説の説明から始めて、後世派医学の特色である気象病理学としての運氣論、薬物の経絡に対する選択的作用である引経報使の論、および配剤の規則を示す君臣佐使・子母兄弟の説について解説し、要するに金元医学が虚証に対する温補の技術を主とするものであり、それは栄養不足・精神不安な戦乱時代の条件に適した効果的な医療であったと説くとともに、平和時代の攻撃的な古方医学への推移を展望している(第二節)。

ついで第一章「後世派医学の受容と発展」では、第一節で、明に留学して金元医学を学んで日本に導入した田代三喜を取りあげ、その伝記とともに、著述と臨床について検討している。とくに著者が発見した『三帰回翁医書』を、それまで断片的にしかなかった三喜の著書の集成である『三喜十卷書』に相当するものと推定して、その内容を紹介している。その第六卷『薬種隠名』の出現によって、他の諸卷にすべて作字で表記されているために、これまで解説不能であった配剤の実体を知ることができるようになったのは、三喜の研究に新生面をひらくものであり、